

※ 未来のこめ王子、田んぼにダイブする

今、僕には風しか聞こえない。

五月の大型連休明けの爽やかな空気が、自転車を飛ばす僕の顔に当たっては周囲に広がる田んぼに散つてゆく。

全力でペダルを漕いでいるから息が上がる。びっちりフィットしたスーツの中で体が蒸発して、そのまま空高く上ってしまいそうだ。

それならもうそれでいい。

ほんの三十分ほど前に、四月に入社したばかりの会社から倒産を告げられた。何十社も落ちて、大学卒業間近にやつと就職できた会社があつさり潰れてしまふなんて、まるで喜劇だ。社長の沈んだ声音と重々しい社内の雰囲気脳裏にフラッシュバックすると、反射的に涙が滲む。

涙を汗だと自分に言い聞かせて、スーツの袖で目尻を拭き、漕ぐ足の裏に力を込め、目の前の景色だけに集中する。

僕が自転車走っている道から一メートルほど下がった左右に、水路の張り巡らされた田んぼが広がっている。ゴールデンウィーク前は水が張られて黒い鏡のようだったのに、今は苗が植わり、うつすら緑色を帯びていた。

昼にはまだ時があるはずだけれど、既に日は高く、空に雲はなく、田舎道には人つ子一人いない。がらんどうだ。

この世でたった一人みたいだ、と思つた瞬間、ふつと心のたががゆるんだ。

田舎道にガードレールなんて存在しない。五十メートル先のゆるやかなカーブが、僕を呼んでいるみたいだ。カーブの先は田んぼ、その向こうは連なる山々、そしてぐんと広がる青い空。気持ちは真つ暗でも空はこんなに明るい。なんとなく嬉しくなつてヘラツと笑い、空の引力に引かれて、ペダルを漕ぐスピードを上げた。

全身筋を集中させて、足の回転速度をもっと上げ、カーブを曲がらずまっすぐ進む。

白線で息を止め、ペダルをぐつと強く蹴り下ろす。手をハンドルから離し、ペダルを踏み台にして、青い空に向かって胸を突き出し、両手両足を広げ、空に飛び出す。

「空！ 飛んでる！」

僕は声を上げた。

全身の細胞が一つ残らず僕と同じ大の字に伸びて歓声を上げている。僕を祝福して、山からこだまが返ってきてそうだ。

空でいっぱいだった僕の視界に、黒い水面がじわじわ現れた。落ちていると気づく頃には、黒色は視界のほとんどを埋め、太陽光をピカリとはげしく反射し、僕の目玉を痛めつける。体を硬くしたせいで、落ちる速度が上がってゆく。

飛んだなら落ちるのが当然だ。田んぼに落ちるくらいどうってことない。

細く弱々しげな苗の隙間に、僕の姿が映った。ジェットコースターの記念写真みたいに、手足をばたかせ、目を見開いた恐怖の表情をしている。

着地の瞬間、水しぶきと泥がバッシャンと盛大に上がる。巨大なミルククラウンが僕を取り囲んで天高く伸びてゆく。

気がついたら、僕は田んぼの中にべたりと座り込んでいた。呆然としていた僕の背後から、車のエンジン音が近づいてきた。

車は僕の背後に停まったようだ。ドアが開いて、乱暴な音を立てて閉まる。

「おい！ 大丈夫か？」

上から声が降ってきた。声の方へのろのろと首を巡らせる。午前白い光を浴びた男の人が、軽トラから飛びでたところだった。

彼は土手をジャンプして細い畦にスタツと下り立ち、小走りで僕の方に向かってくる。

大きい人だ、とのんきに思った。ずいぶん背が高く、体格がいかつい。僕が田んぼにべったり尻をついているから余計そう見えるんだろうか。

彼はバッシャンと派手に水音を立てて田んぼに入り、ぐんぐん近づいて僕の前で立ち止まった。

山から下りてきた人みたいな風貌だ。もしやもしやの髪と無精ヒゲの間に、日に焼けた地肌があつて、そこに無理に収まっているような眉毛は太く、まつげも長くて目も大きい。黒々とした目でじつと見られ

ると、ちよつと怖い。よれよれの作業服と黒い長靴も、僕の知らない世界からやってきた人のものみたいだ。

「ケガは！」

迫力のある顔から、鬼気迫る声飛びでた。風圧で、僕の前髪がわずかに揺れる。

僕はゆっくり振り上げた。軽い目眩がして、体が傾く。バランスを取ろうと手をつけば、水が跳ねた。目に入った水を拭くと、泥が目に入ってしまった、ごろごろした違和感でいっぱいになった。

「おい、立てるか？」

彼の声に、僕の身を案じているような優しげな色が混ざる。

「……わ、かんないです」

知らない間に口の中が乾いていて、かすれ声しか出なかった。

白っぽくゆがんだ視界で自分の姿を見下ろすと、紺のスーツがチョコがけたバナナさながら泥でコーティングされていた。腰から下がぜんぶ田んぼに埋もれている。泥つて洗ったら落ちるんだろうか。けれどももう仕事を失くしたんだからスーツなんてどうでもいい。そんな他人事みたいな気持ちも僕の中でぐるぐる回って、目眩がひどくなる。

「引つ張ってやる。ほら、手」

ぬつと、大きくて分厚い手のひらが差し出された。ふたたび見上げれば、彼の心配そうな目と出会う。

僕はとつさに首を振った。恥ずかしさが湧いてきたからだ。どろどろになつて田んぼに座り込んでいる自分を見られている。穴があつたら入りたい。

「ここにいたいのか？ それとも、自分で出られるんだな？」

彼はギョツと眉を寄せて、僕をきつく見据えた。

「きみが飛び込んだのは、うちの田んぼ。俺の生活がかかっている田んぼだぞ」

強い視線を受けて、恥ずかしさがきゅるきゅると萎んでゆく。さあっと血の気が引いて、どつと後悔が押し寄せる。

「すみません！ 僕、龍川万里ついでいいいます。つい出来心で田んぼに落ちてしまいました！ 弁償します！」
がばつと頭を下げる。

現実に戻れば田んぼの中は冷たかった。泥に埋もれて身動きも取れない。寒さだけじゃなく後悔と罪悪感が体が震えはじめる。

しばらくして、上からハーツと大きなため息が聞こえた。

「事故じゃなかったわけか。なんでそんなことしたのか知らないけど、下手したら大怪我だったかもしれないんだぞ」

田んぼじゃなくて僕を心配してくれたことがすぐにはわからなくて、ほかんと彼を見上げる。

「まー、無事でよかつたよ」
指で顎を搔きながら彼は、咬き、おずおず差し出した僕の手を、引つ張り上げてくれた。

目の前のご飯と味噌汁からふんわりと白い湯気がたなびいて、銚色のちやぶ台の向こう側にいる彼の頭の上に消えてゆく。そうつと窺った表情からは、田んぼを滅茶苦茶にされた怒りも悲しみも見つからず、かえって居たたまれない。

田んぼから助けだしてもらった僕は、放心したまま軽トラで彼の家に連れてこられた。どろどろの体を五右衛門風呂で洗わせてもらっている間、彼は僕の服を洗濯して、着替え用に下着とTシャツとハーフパンツを用意してくれた。僕と同じように田んぼに落ちた自転車泥を落としてくれた。そして今、僕はぶかぶかの服を着て、作りたての昼ご飯の前に、正座している。

現金なもので、食欲をそそる匂いを前にすると口の中に涎がたまった。今はそんな悠長にしている場合じゃないだろうと膝に乗せている手を固く握る。

「じゃあ飯、食うか」

彼が穏やかに宣言した。

「えっ、でも……」

ふかふかの座布団に厚かましく座っておきながら、本当に食べてもいいのか躊躇う。

「どうせ昼時だし、遠慮しなくていい。話は後だ」

「……わかりました。じゃあ、いただきます」

彼と同じように手を合わせてから、おそるおそる箸とおつゆ茶碗を手取る。

ネギと豆腐の味噌汁を一口啜ってすぐに顔を上げ、気づいたら目の前の男に話しかけていた。